

二〇二五年度入学試験問題

B

国語

(一〇〇点 六〇分)

《注意事項》

- 一、試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはならない。
- 二、この問題冊子は全部で12ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合申し出ること。
- 三、解答には黒鉛筆又はシャープペンを用い、色鉛筆、万年筆などを使用してはならない。
- 四、解答用紙は1枚(表と裏)である。
座席番号(数字)、氏名を解答用紙の指定欄に記入すること。
- 五、この問題冊子の余白は、自由に利用してよい。
- 六、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、文章の一部や小見出しを省略するなどの改変を施している。)

現在の人間たちの協力の最たるものは「職業」です。多くの人は職を持っていて、特定の仕事をするだけで生きていけるようになっていきます。私の場合であれば大学教員ですので、大学で講義をしたり、研究をしているだけで給料をもらって、衣食住を①賄うことができます。私が身に着けている衣服も毎日食べている食料も、住んでいる家も、自分で作ったものではありません。作ろうと思っても質の高いものは作ることができません。その代わりに他のもっと技術のある人間が仕事として作ってくれたものを買っています。

現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、これは大きな協力関係です。皆が自分以外の誰かのために質の高い仕事をすることで、全員が安全で快適な生活を送ることができています。

職業という協力関係の重要さは、誰かが仕事を辞めたらどうなるかを考えるとすぐにわかります。たとえば、衣服を作る仕事の人が全員辞めてしまったら、みんな自分の服は自分で作らないといけなくなりそうです。きっと②ソマツな衣服しか作れないことでしょう。忙しい人は全く作れないかもしれません。着替えを用意しておくのも大変ですし、洗っているうちにほろになるでしょうから、洗濯もあまりしなくなるでしょう。衣服は汚れ、感染症も広まりやすくなるかもしれません。現代人が安く品質の高い衣服を手に入れることができているのは、作ることに特化した人が専門に作ってくれるおかげです。

そしてそれは一方的な関係ではありません。衣服を作る人も食料や住居は別の専門家に作ってもらっています。私たち人間は、現在、社会という大きな協力関係の網の目の中に組み込まれています。

「社会の中に組み込まれる」ということは「社会の歯車になる」ということです。この言葉にはあまりいい印象はないかもしれませんが。自分の個性とかアイデンティティがおびやかされていると感じるかもしれません。しかしそれは誤解だとは思いますが。むしろ社会の歯車になることでほとんどの人は個性を發揮して、みんなの役に立てるのだと思います。

A、社会が全く存在しない状況を考えてみましょう。父親、母親、小さい子どもの3人家族だけで無人島で暮らし

ているような状況です。この場合、生きていくために必要な仕事はすべて3人だけで分担しないといけません。狩りをするのは、生物的に力の強い大人の男性である父親になるでしょう。植物や果物を採集したり、調理したりするのは、狩りに不向きな女性や子どもの仕事になるでしょう。たとえ、狩りなんて荒っぽいことが嫌いな男性や、採集よりも狩りの方が好きな女性だったとしても、餓えないためには身体的に向いている方をやらざるをえません。狩りに失敗したり、食べ物を見つめることに失敗したりすれば、すぐに命の危機が訪れます。また、この世界では、勉強が得意とか、絵をかくのが得意とか、コミュニケーション能力が高いとか低いなどの個性が役に立つことはありません。なにより必要なのは、獲物をしとめたり、食料を確保する能力です。力や体力が何よりも重要です。強く丈夫で健康な人間だけが生き残る世界です。それ以外の個性には出番はありません。

一方で私たちの社会は違います。力や体力が必要な職業もあれば、勉強や絵を描くことやコミュニケーション能力が必要な職業もあります。どれか1つの能力が優れていれば、十分に活躍の場が見つかります。少なくとも (1) 狩猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割(歯車)が見つかる可能性が高いように思います。

こうした他人との協力からなる社会を形成するようになる、人間という生物が増える単位も変わってきます。人間以前の生き物は自分の力で自分だけを増やしていました。細菌も線虫もカエルも虫もサルも、増えることができるかどうかは自分の能力や運によって決まっていました。優れた能力を持っていれば生殖に成功し、子孫を作ることができますし、そうでなければ血統は途絶えてしまいます。

B 協力関係の網の目の中にいる人間は違います。自分が生き残って増えるためには他の人の能力も重要です。また自分の能力もほかの人が生き残って増えることに貢献しています。自分の命が大事なものと同じように、他の人の命も大事になっていきます。増える単位が自分の体を超えて広がっているといってもいいかもしれません。

(2) このような大規模な協力関係は人間ならではの特徴です。人間以外の生物が非血縁個体と協力することは、特殊なケースを除いてほとんどありません。なぜ人間のみでこのような特殊な能力が生まれたのかについてはいろいろ説があります。人間の持つ高度な言語能力や認知能力や寿命の長さが大事だったと言われています。また、それらの能力が生まれた背景に

は、狩猟採集生活の中で協力する必要性があったことや、子どもが成長するまでに時間がかかることから子育てに他の個体の協力が必要だったことなどが指摘されています。

このような性質のどれが直接的な原因だったのかはわかりませんが、いずれにせよ、このような他の個体との協力を可能とする人間の性質は、元をたどれば少産少死の戦略によってもたらされたものです。命を大事にして長く生きるようになり、他個体と付き合うことが可能になったために協力することが有利になりました。

C、人間には他者を認識する知能や、他者の気持ちを探知することのできる共感能力も備わっています。結果として協力関係がどんどん発展していきました。⁽³⁾ 私たち人間は地球上の他のどんな生物よりも協力的な、いわば「やさしい」生物です。このようなやさしさの進化は少産少死の戦略を極めてきた生物にとって必然だったように思えます。

現在の人間は他人と協力することでより生き残りやすく増えやすくなっています。この他者と協力をする効果は圧倒的です。地球上の人口が2022年現在約80億人に達し、このまま進めば110億人くらいに落ち着くと予想されています。

同じくらいのサイズの類人猿であるチンパンジーは17〜30万頭、ニシローランドゴリラは32万頭しかいないことを考えると、これはこのサイズの大型生物としては破格の数に達しています。生息域も広がり、地球上のすべての場所を^③踏破し、宇宙にまで進出するようになりました。それもすべて、多くの人間が協力したからこそなされた成果です。人間が衣食住をすべて個人で賄っていたら、決して宇宙には到達できなかったことでしょう。

D、この⁽⁴⁾他者との協力には弊害もあります。協力関係が増えることに対してきわめて有効であったために、人間はもはや他者の協力なしでは生きていけなくなってしまうています。もし、1人で無人島に流れ着いたとしたら生きていけるでしょうか。衣食住をすべて自分で賄わなければなりません。毎日、水と食べ物を心配しないとならず、おなか一杯になることはなく、トイレもなく、寝るときは虫に悩まされ、病気や怪我をしても誰も助けてくれないそんな生活です。頑張ったらしばらくは生きていけるかもしれませんが、そんな生活だったら死んだ方がましな気がしてきます。

私たちは自分を含む多くの人の共同作業によって、効率的で快適な社会に住むことができています。ほとんどの人はこの社会を捨てて自給自足の生活に戻るとは望んでいないでしょう。そもそも、自給自足の生活にもどったら今の人口はも

う維持できません。たとえば、1万年前までの人類は狩猟採集生活を送っていましたが、この生活スタイルでは地球上でせいぜい500万人程度しか維持できなかったようです。もし、今の社会を捨てて狩猟採集社会に戻るとすると、現在生きている約80億人のほとんどはすぐに死んでしまうことになります。多くの人にとってこれは耐えられることではないでしょう。

E、私たちが現代の高度な協力関係で結ばれた社会を維持することは、もはや義務になっています。これは協力することで増えてきた人間という生物にとっては当然の結果です。私たちは協力しないと、今の人口も快適な生活も維持することはできません。協力することが増えることに貢献すればするほど、協力を善いものとみなし、他人にもそれを強いる性質が子孫の中で強化されていきます。そして私たちはますます協力するような性質と倫理観を持つようになってしまっています。人間が協力関係を増やすことによって大成功したことが、現代人の抱える他者との関わりの悩みを生み出しています。現代に生きる人間はすべて他者と協力することで増えてきた生物です。協力しやすい性質を持っているのは間違いないですが、同時に協力しなければならぬという規範も（先天的か後天的かによらず）受け継いでいます。したがって私たちは、身近にいる人と協力的な関係を④キズけていない、つまり仲が悪い、あるいは嫌いで協力したくない状況にあると居心地が悪く、悩んでしまうことになります。

しかし、よく考えてみるとこのような悩みは理屈に合わないところがあります。たしかに現代社会は人と人との協力関係によって成り立っていますが、だからと言って、必ずしもすべての人と仲良くなる必要はありません。現代社会の協力関係は洗練されており、個人の好き嫌いにはあまり影響を受けなくなっています。現代社会のまっとうな企業であれば、そのような個人的な好き嫌いで仕事⑤が滞⑥ることは避けるようになっています。つまり、仲が悪いからといって協力関係が⑥クズれているわけではないのです。

学校での同級生との関係性についてはなおさら関係ありません。学校でみんなと仲良くすることを教えられますが、それは社会を維持するための協力を身に着けるためです。大人になって職業についたときに、仕事を円滑に行なうために必要な程度に協力的であれば十分なはずで、すべての人間と仲良くなる必要はありません。しかし、私たちは不必要なまでに他

者との関わりを気にしてしまいます。嫌いな人間、仲の悪い人間が近くにいることにストレスを感じてしまいます。ここには、⁽⁵⁾ 私たちの考え方と現代社会のしくみとのズレがあるように思います。

〈市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』に拠る〉

問一 二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄 A ～ E にあてはまる接続詞を次から選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ しかも ウ ところが エ ただ オ したがって

問三 傍線部(1)「狩猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割(菌車)が見つかる可能性が高い」について、なぜ筆者は「狩猟採集社会」は「今の社会」より「自分に合った役割」が見つげにくいと考えているのか、四〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問四 傍線部(2)について、「人間」に「大規模な協力関係」をもたらした要因を文中から七字で抜き出しなさい。

問五 傍線部(3)について、「人間」が「協力的」で「やさしい」生物」になるために必要だった力を文中より三つ、すべて四字で抜き出しなさい。

問六 傍線部(4)で筆者が述べる「弊害」の中身を二つあげ、それぞれ四〇字以内(句読点を含む)、七〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問七 傍線部(5)について「私たちの考え方」と「ズレがある」という「現代社会のしくみ」の説明として適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者と協力しあうことで、人口を増やし、快適な生活を維持することができるという社会のしくみ
- イ 協力しあえる人間たちが、協力しなければならぬという規範を受け継いでいく社会のしくみ
- ウ 人間が協力しあうことで大成功をおさめながら、一方で同じ人間関係で悩んでしまう社会のしくみ
- エ 生活を維持するための協力を学校で教えられることで身につけていくという社会のしくみ
- オ 仲が悪くても協力関係はくずれないため、すべての人と仲良くなる必要はないという社会のしくみ

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、文章の一部を省略するなどの改変を施している。)

私たちが「他者」と出会う場面を思い出してみよう。仮に私が「完全な理解」こそ「適切な理解」だと思っている人だとしたら、そこでどんなことが起きるだろうか。

まず、私は他者を「理解」しようとし、手持ちの「類型」(注1)を適用しようとする。もちろんその「類型」は他者そのものに比べて「過少」であり、私は「より多くの理解」を求めて「類型」をより①繊細にするため努力するだろう。私はそれを何度も繰り返し——その結果「完全な理解」に達せられればよいが、現実にはそれはありえない——、次のような地点に達する。原理的には「理解は過少」であるが②実践的には気にならない地点、つまり「理解」と「他者」の差分(注2)を「わかりあはずだ」||「同じはずだ」という「理念化」||思い込みによって乗り越えられる地点。

ところが、次のような場合はどうすればよいだろうか。私は「類型」を繊細にする努力を重ね、「理解」に対する「他者」の差分を減らそうとする。だが、いくらそれを繰り返してもいま述べた地点に達しない。つまり、差はあるが「わかりあはず」と思い込める地点に到達できない。日常の「理解」を可能にする「理念化」を作動させるには、「わからなさ」が大きすぎる。——考えてみれば、そんな「他者」はいくらもいるはずだ。私たちはそうした「他者」と「社会」を作らなければならぬ場面にも出会うはずだ。「完全な理解」||「適切な理解」と考える人々は、それでもなお、こうしつづけるだろう。このような「理解の過少」は、まったく「適切」ではない。なんとか「完全な理解」に近づけなければならぬ。もつともつと「より多くの理解」を——しかし、もうそれが一步も進まない点に達することはありうる。このとき、それでもなお「理解」という技法を採用する人々は、たとえば、次のようなことをするかもしれない。

第一。いまの状態は、通常の「わかるはず」の理念化を作動できるはるか手前にいる。しかし、それを作動させてしまおう。彼らは「理解できる」はずなのだ。「同じ」はずなのだ。そうではないところ、それはもう見ないで、存在しないことにしてしまおう。「理解できる」領域に切り縮めた彼らと、つきあっていくことにしよう。——「わかる」ところだけつ

きあうこと。よく考えれば、これはじつは「差別」という現象に近い。手持ちのおおざっぱな「類型」で「理解」できるようにし、ひとしなみに他者を扱う。そのように「わかられてしまう」ことは、他者に怒りと悲しみを生む。

第二。私たちは、ここまで彼らを「理解」しようとしてきた。しかし、どうにも彼らが「わからない」。これほど努力しても、「理解」する能力を繊細に作動させても「わからない」とすれば、私たちが彼らと「いっしょにいる」ことはできないだろう。私たちは、彼らと「いっしょにいる」ことをやめよう。「わからない」のだから、他に方法はない。——「わからない」ところとつきあわないこと。いうまでもなく、そのひとつの形態が「暴力」である。「わからない」人を前に、私たちは「いっしょにられない」と感じる。そして、ただ別れていくだけのこともあるが、「なぐりあい」を始めることもある。

もしかしたら、そのようなところに着地せず、もっと「理解」のために努力しつづけるべきだ、と感じておられる読者がいるかもしれない。もちろん、そうしつづけられる状況があることは確かだ。しかし、私はこう考える。私たちが出会う「他者」は、つねに、私たちの「理解」の技法がたどり着けない領域をもっている。どうしても、「理解」という技法では、「いっしょにられる」水準まで「わからない」ような「他者」は、存在する。そのとき、なお「理解」という技法を使用することは、なにも生まない。むしろ、いま述べたふたつの地点に、「理解」の努力に疲れた私たちが着地させてしまう。「理解」^③に囚われることは、私たちに「理解」以外の技法を、さまざまに「他者」という技法の回路を開くことを閉ざしてしまう。それ以外の技法を開いておけば、このような着地点に着地しなくてすむのに、「理解」に囚われるとそれができなくなってしまう。

私たちがよく知っているのは、「わかりあう」から「いっしょにられる」という状態だ。だから、「わかりあえない」とき、「いっしょにいる」ために「もっとわかりあおう」とする。それは、おそらく「社会」という領域のある部分では、必要なことだし大切な成果を生むだろう。しかし、この技法しかもたないとき、「わかりあえない」と私たちは「いっしょにいられなく」なってしまふ。おそらくもうひとつの技法があるのだ。「わかりあえない」とき「もっとわかりあおう」とするのではなく、「わかりあえない」けれど「いっしょにいる」ための技法、「わかりあえない」ままでひとつの「社会」を作っ

ていく技法。私は、「他者」ということ、「社会」を形成することの少なくともある領域において、このような技法を探すことが必要だと思う。「わかりあわない」と「いっしょにいられない」、「社会」がつくれぬ、という技法は、私たちの「社会」の可能性を大きく限定する。「理解」は「他者」との「共存」のためのひとつの技法でしかなく、このふたつは別のことなのだ。私たちはときに、他者との「共存」よりも「理解」のほうを目的として設定してしまう。しかし、「理解」できない他者と「社会」を作る場面はあり、そのとき「理解」に囚われることは、私たちを「共存」できなくさせてしまう。私たちは「理解」を断ち切り、それ以外の「共存」のための技法を開発し始めなければならぬ。

少し乱暴な言い方だが、「理解」とは、私とあなたの「同じさ」につきあい、それを広げていく技法である。それをていねいに行っていくことは、私たちに大きな可能性を開き、「社会」という領域をゆたかに形成していく。しかし、私とあなたの「違い」につきあうことは、どうやらそれとは別の技法が必要である。

「理解」とは別の技法、「わかりあえない」まま「いっしょにいる」ための技法。——では、それはどんな技法なのだろうか。残念ながら、いま私にできることはほんのわずかなことしかない。しかし、さいごに、不十分でもそれを考えておきたいと思う。

抽象的にいえば、こうだろう。私が他者と出会うとき、その間には乗り越えられない「差分」が存在する。シュツツのいう「理解」の構図は、その差分を、「わかりあえるはず」＝「同じはず」という「理念化」、いやフィクションでやすやすと乗り越えていく、というものだった。「理解」とは、いわば「他者はわかるはず」という想定をもちつづけて他者ということを④模索する技法である。それには多くのことができるが、埋められない「わからなさ」が残るとき、それに対処できず、「いっしょにいられない」事態を生む。

これに対し、その「差分」や「わからなさ」にこそつきあう、という技法があるように思う。「理解」はそれに直接はつきあわない。それを「わかれろ」とする。「なくそう」とする。しかし、他者に「わからない」差分があるのを前提に、それがありつづけてなおどうすれば「いっしょにいられる」かを考えることもできる。いわば「他者はわからない」という想定を出発点として、他者というものを模索する技法である。「他者はわかるはず」と思うと「いっしょにいられる」領域は

限定されるが、「わからない」のが当然と考えるならば、私たちはずっと多くの場合「いっしょにいること」ができるように思う。

具体的に私に伝えるのはごく⑤ソボクなことにすぎない。そのひとつは、ありふれているが、「話しあう」ということである。「話しあう」ということを始めるのは、しかし、とても難しい。なぜなら、それを始める地点は、「私はあなたのことかわからない！」と宣言する地点だからだ。いま「理解がない場所」にお互いがいることをはっきりと認めることなしに、「話しあう」ということは始まらないだろう。「完全な理解」が達成された「同じ人々」の間、私たちは「わかりあっている」という想定がある場所では、きつと「話しあう」ことは必要ないし、そのための技法を開発することはできない。少しクワしくいうと、「話しあう」ということは、次のふたつからなりたつ。ひとつは、「尋ねる」「質問する」ということ。これは、いうまでもなく「わからない」とき、その「わからなさ」につきあっていることとするときにのみ、開かれる。もうひとつは、「答える」「説明する」ということ。これも、相手が私を「わかっていない」と感じるときにしか、始まらないことだ。

「話しあう」こと。「質問しあい」「説明しあう」こと。——これは、じつに居心地の悪い時間を私たちに開いてしまう。もう一度いうが、このことは「わからない！」と相手にはつきり伝えることからしか始まらず、ひとつひとつ「質問し」「説明する」ことは⑦ソウホウにこころの負担をかけることだし、「わかりあっていない」ことを自覚しながらいっしょにいる時間をずいぶん長く共有することになる。しかし、この①「話しあう」技法を身につけているとき、人は「わかりあわな

い」ときにも「いっしょにいる」ことができる。

〈奥村隆『他者という技法』に拠る〉

注1 似ている型

注2 違うところ、差

問一 二重傍線部①～⑦について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 本試験の□一と□二の問題文は共通のテーマを取り上げていることをふまえ、以下のⅠ～Ⅲの問いに答えなさい。

Ⅰ □一と□二の問題文に共通するテーマとは何か。空欄□Aにあてはまる二文字を□二の本文から抜き出しなさい。

共通するテーマ □Aとの関係性

Ⅱ □一と□二の問題文では、□Aとの関係における問題点とそれが起こる理由についてどのように説明しているか。次の文章の空欄□B～□Eにあてはまる内容を書きなさい。それぞれの空欄に入る内容が「抜き出し」か「説明」か、字数制限がどれくらいかについては各空欄の指示に従うこと。また空欄□Bにあてはまる言葉は□一の問題文から抜き出し、□C～□Eは□二の問題文の言葉を使用すること。カギカッコ、句読点はいずれも一文字とする。

□一の問題文では、すべての□Aと□B抜き出し・三字□でなければならぬと考えることで、嫌いな人間、仲の悪い人間が近くにいるとストレスを感じてしまうという問題点が指摘されている。

□二の問題文では□Aの□C抜き出し・五字□に到達しなければならぬと考えることで、もし□Cに到達できない□Aに出会った際に、□D三〇字以内で説明□状態になったり、□E三〇字以内で説明□という形態につながったりしてしまうという問題点が指摘されている。

Ⅲ 一と二の問題文では、Ⅱのような問題点をふまえて二人の筆者がどのような主張をしているか。次の文章の空欄 F と G にあてはまる内容を、二の問題文より抜き出しなさい。字数制限については各空欄の指示に従うこと。なおカギカッコ、句読点はいずれも一文字とする。

一の問題文では、現代社会のしくみから考えればすべての A と B でなければならないと考える必要はないとされる。

二の問題文では、現実的には A の C に到達することはありえないし、 F 抜き出し・二十二字 という技法は「社会」の可能性を限定するので、 G 抜き出し・三十五字 技法を身につけるべきだとされる。

問三 傍線部(1)について、なぜ「話しあう」技法を身につけているとき、人は「わかりあわない」ときにも「いっしょにいる」ことができる」のか。五十五字以内(句読点を含む)で説明しなさい。